

音楽科教員養成におけるグループでの 模擬授業づくりの成果と課題

大野内 愛
(2023年10月6日受理)

Achievements and Challenges in Creating Mock Lessons as a Group
in Music Teacher Training

Ai Oonouhi

Abstract: This study aims to reiterate the results and challenges of creating mock lessons as a group. The object of the study was the process of creating a mock lessons as a group recorded by the students and their impressions of the process in a class that the author was in charge of. The group consisted of five members, whose roles were representative, recorder, instructional planner, pre-service teacher, and teacher of the mock lesson. Before the mock lesson another teacher gave a lesson as a rehearsal, which was the first time this project was conducted. The first was that we were able to study the lesson with an awareness of the actual situation of the students. Second, it provided an opportunity for the students to form a new view of the class. On the other hand, the issue is that each student has his or her own individual view of the class. It is one of the results that the students were able to update their own views of teaching, which were based on their own experiences in the past, in the course of creating classes in groups. On the other hand, the problem is that it is difficult to create classes that make the most of the individuality of each student. This did not lead to the creation of classes that made the most of each student's strengths.

Key words: Music teacher training program, mock lesson, instructional plan, group work

キーワード：音楽科教員養成課程，模擬授業，指導案，グループでの作業

1. 研究の動機と目的

筆者は広島大学教育学部音楽文化系コースにおいて、3年生対象の「音楽科実践論」という授業を担当している。本授業の直後に、履修者らは中・高等学校の教育実習を行うことになっているため、授業の内容は指導案の作成と模擬授業の実施としている。履修者らは2年次の授業において短時間の模擬授業を体験しているが、そこでの学生同士による評価では、授業の「型」や教師としての人間性については高評価であった一方、生徒の立場に立った授業という視点において課題が見られた。この結果は、当該学年に限ったことではなく、これまで初めて模擬授業を実施した学生の

ほとんどに当てはまるもので、授業の「型」や先生らしさといった「それらしいこと」は準備することができても、その場にいる生徒に目を向けて授業の進め方を工夫する余裕はない。

こうした課題の克服への方法を検討するため、これまで筆者は「音楽科実践論」を対象に、模擬授業準備のプロセスに着目し、問題の所在を探った(大野内2022)。その結果、そもそも準備の段階において、生徒の反応を予測しての指導方法を考える行動や生徒の深い学びを実現するための検討行動が行われていなかったことが明らかとなった。

そのほかに、学生による音楽科の模擬授業に関する先行研究では、まず模擬授業を実施することによる学

生の学びへの有効性や課題をまとめたものがある（日高2018, 安藤2015, 松浦2017）。また、特色のある実践報告として、教科教育と教科専門を横断する授業づくりについて紹介しているもの（小川ら2018, 飯田ら2018）や、教科教育の学生と特別支援教育の学生の合同グループでの授業づくりを紹介しているもの（菅ら2009）、オンラインを活用した模擬授業の実践を報告しているもの（小林2021）がある。そのほかに、模擬授業の自己評価・他者評価のあり方を検討するため、eポートフォリオを活用した実践を報告したもの（山口2021）や自作ルーブリックによる効果をみたもの（渡会2018）がある。さらに、近年の学生の傾向を探るものとして、学生が何に注目して模擬授業を受けているのか明らかにしたものがある（藤田2019）。ここでは模擬授業を受ける学生は、音楽技能面、伴奏面、教師の知識面に注目して受けているという結果が出ている。また、大学生の音楽授業観が現職教員のそれと大きく乖離していることを示したものがあり（宮下・森長2001）、ここでは乖離の原因として、学生が現役の中・高等学校で受けた授業をそのままイメージしていること、レッスンなどの専門的な音楽教育を学校音楽教育の授業観に反映させてしまっていることが予想されている。

人数的、時間的な問題や学び合いの観点から、先行研究の多くで扱われているのは、複数の学生（グループ）による模擬授業である。しかしながらグループという形態に着目した模擬授業づくりに関する成果と課題を明らかにした研究は見あたらない。グループによる模擬授業づくりは、多くのアイデアが集まる反面、時間がかかり、フラストレーションを感じる学生も少なからず存在する。それでもグループという形態で模擬授業づくりをすることにはどのような意義があるのだろうか。

以上のことから本研究では、グループでの模擬授業づくりの成果と課題を改めて明らかにすることを目的とする。併せて、グループでの模擬授業づくりの中では、より生徒の実態に合わせた授業への検討を深めさせるため、模擬授業の予行練習をグループごとに実施させた。この取り組みの成果についても明らかにしていく。

2. 対象授業の概要

対象とする授業は、広島大学教育学部音楽文化系コースの専門科目「音楽科実践論」である。5セメスター（3年前期）に開講されており、教育実習を控えた学生が履修している。2023年度は20名の学生が履修

した。

グループ分けにあたっては、教育実習に行く附属学校がバラバラになるよう配慮しながら¹⁾、学生たちに自由に決めさせた。学生を歌唱・器楽・創作・鑑賞の4グループ（1グループ5名）に分け、5名それぞれに役割を与えた。役割は次のとおりである。

《役割》

- 1 代表・司会（連絡、全体の取りまとめ、司会）
- 2 記録（毎回の話し合いの記録）
- 3 指導案作成（指導案のたたき台作成）
- 4 予行練習の授業者
- 5 模擬授業の授業者

「音楽科実践論」の授業では、まず、歌唱・器楽・創作・鑑賞をなぜ学校教育で取り扱うのか、ということ話し合い、その目的を共有したのち、学習指導案の書き方を再確認した上で、模擬授業づくりに入った。模擬授業で扱う教材はグループごとに自由に選択させた。模擬授業の1週間前には、模擬授業の授業者とは別の授業者による予行練習を実施させ、そこに筆者も同席した。

3. グループによる模擬授業づくりのプロセス

各グループには、模擬授業づくりのプロセスを記録させた。どのグループも指導案作成係の学生が作成したものをたたき台としながら授業づくりを進めていった。そのたたき台からの検討事項について、予行練習[前]と[後]の変化を見る。なお、記録された検討事項は、KJ法により「授業構成」「教材・教具の工夫」「具体的な指導方法」「興味をもたせる工夫」「時間設定」「生徒指導」「評価」に分類した。

3-1. 歌唱グループ

歌唱グループは、教科書には掲載されていない「Believe」という楽曲を用いた歌唱表現を扱う授業を構想した。内容としては歌詞を具現化したような手の動きに着目させながら、手話を用いて歌唱させることにした。自分の発している言葉（歌詞）を、手話を用いて表現させることにより、より感情を表出させようと試みたものである。

表1は予行練習[前]と[後]の検討事項をまとめたものである。予行練習[前]の検討事項では、手話をさせての歌唱表現という、授業の中心的な部分にばかり注目した検討が行われていたが、予行練習[後]には、まず、見過ごしていた導入部分について、呼吸練習、

発声練習をここで行う意図は何かということを再検討している。そのほかにも、生徒をグループに分けて手話を練習させる場面においてその意図は何かを検討したり、その後にクラス全体で手話を使って歌うことの目的を再検討したりしている。中学校の授業において、まずグループで話し合い、最後に全体で共有するというのは、頻繁に使用されるパターンだが、歌唱グループの学生たちは、始めはそのパターンの「型」だけを真似ており、意図まで考えていなかった。そのことに気づき、予行練習 [後] に検討が行われていた。

表1 歌唱グループの予行練習前後の検討内容

	予行練習 [前]	予行練習 [後]
授業構成	・2時間構成	-
具の工夫・教材	-	・教材を混声3部合唱ではなく2部合唱にする
具体的な指導方法	・手話を用いて歌詞の意味の理解を深める ・手話から動きと言葉の連動に気づかせて、歌の表現に繋げる	・導入の意図は声を出させること ・呼吸法、発声練習の意図を考える ・お手本の注目ポイントを決める ・グループ活動の目的を決める ・全体で手話をさせることの意図を考える ・お手本の手話を左右逆にする
興味をもたせる工夫	・手話をクイズ形式で出題して興味をひく	-
設定時間	-	-
指導生徒	・パート練習では目的をもって取り組めるよう声掛けする	-
評価	-	・思考力・判断力・表現力をどこで見るのか検討する

3-2. 器楽グループ

器楽グループは、教科書に掲載されている「浜辺の歌」のリコーダー奏をとおして、曲の形式を理解した上での演奏表現を考えさせる授業を構想した。

表2は予行練習 [前] と [後] の検討事項をまとめたものである。予行練習 [前] には、形式やフレーズを理解させるための工夫を中心に検討していたが、予行練習 [後] には「知識の全てを説明しない」や「説明の時間を短くする」など、無駄な部分をカットしていくための検討が行われていた。また予行練習 [後] は、器楽の授業としてのリコーダー演奏へのアプローチが欠けていたことに気づき、「階名で歌う」などの工夫が加えられた。

表2 器楽グループの予行練習前後の検討内容

	予行練習 [前]	予行練習 [後]
授業構成	・歌唱と器楽の関連をさせる授業にする ・2時間構成で歌とリコーダー両方に関する知識を入れる	・知識の全てを説明しようとしな
具の工夫・教材	・ワークシートに楽譜を載せる際、アウフタクトを改訂させることでフレーズをわかりやすくする	-
具体的な指導方法	・曲のまとまりや形式に関することを生徒の気づきから引き出す ・歌唱を利用して表現して吹けるようにする ・形式の説明のために歌詞を利用する	・リコーダーを吹きやすくするため階名で歌ってあげるなど生徒の目が楽譜に追いつくようにする
興味をもたせる工夫	-	-
設定時間	-	・説明の時間を短くする
指導生徒	-	・CDを聴いている時間に教師がすることを検討する
評価	-	-

3-3. 創作グループ

創作グループは、教科書にある、言葉の抑揚に合わせた旋律づくりをヒントに「CMソングを作ろう」という授業を構想した。旋律の創作にあたっては、Googleが提供している無料Webアプリ「Song Maker」を使用した。このアプリを使用すると、楽譜の知識がなくても、マス目をなぞると旋律を作ることができ、簡単に作った旋律を再生することができる。

表3は予行練習 [前] と [後] の検討事項をまとめたものである。予行練習 [前] は、Song Makerの良さにばかり気を取られていたが、予行練習 [後] では、アプリの説明や設定に多くの時間が取られたことを反省し、「説明は1文に指示1つ」「指示は視覚的にもする」など、旋律創作以前の部分に着目している。また「イヤホンを使う」という内容は、実際に予行練習をしたことにより、気づいた点であった。さらに、予行練習で生徒が創作した旋律に対して即座にフィードバックできなかったため、「作られる旋律の予測をしておく」という検討が行われていた。

表3 創作グループの予行練習前後の検討内容

	予行練習 [前]	予行練習 [後]
授業構成	・2時間構成	

具の 工夫・ 教	・ Song Maker を使う (簡単で、視 覚的に旋律の流れが見える)	-
指 導 方 法	・ CM ソングを制作する (抑揚と旋 律の関係を意識させるため)	・ 授業内容につながりやすい CM を 導入で使う
興 味 を も た せ る 工 夫	-	-
設 定 時 間	・ 生徒の活動時間を多くする	・ Song Maker の設定で時間を取られ ないようにする
生 徒 指 導	-	・ 作られる旋律の予測をしておく ・ イヤホンを使って集中できるように にする ・ 説明は 1 文に指示 1 つ ・ 指示は視覚的にもする
評 価	-	-

3-4. 鑑賞グループ

鑑賞グループは教科書の教材「ブルタバ」を用いて音楽を形づくる要素と曲想との関わりを扱う授業を構想した。楽曲の背景や作曲者に関する情報を、興味をもって理解させるため、グループによるインターネットでの調べ学習という活動を取り入れ、生徒の興味に基づいた授業を検討していた。

表4は予行練習[前]と[後]の検討事項をまとめたものである。予行練習[前]は、主に生徒の意欲を持続させるための方法について検討していたが、予行練習[後]はより細かくワークシートや音源、スライドの修正がなされた。

表4 鑑賞グループの予行練習前後の検討内容

	予行練習[前]	予行練習[後]
構 成 業	・ 2 時間構成で、曲の背景について 調べる時間と、音楽の構成につ いて学時間に分ける	-
具 の 工 夫・ 教	・ ワークシートを穴埋めと自由記 述の両方にして作業にならない ようにする	・ ワークシートに楽譜を入れる ・ 音質の良い音源を使う
指 導 方 法	-	・ 調べ学習の共有方法をクラウドに する
興 味 を も た せ る 工 夫	・ 標題当てクイズをする ・ 楽曲についての知識を、興味を 持たせるため、調べ学習にする	・ 導入を、復習するだけでなく、有 名な曲を使って興味をもたせる
設 定 時 間	・ 一人一人が考える活動を多めに する	・ 1 時間の内容を少なくして、それ ぞれが薄くならないようにする
指 導 生 徒	-	・ スライドで楽器の写真を大きくす る
評 価	-	-

3-5. プロセスから見る予行練習の成果

各グループの予行練習の[前] [後]の検討事項を比較したところ、予行練習[前]は、中心となる授業内容に関する検討事項が多くを占めていた。授業の目標を達成するための中心的な部分ばかりに気を取られ、何かを「加える」という方法で工夫を検討していたように見える。

一方、予行練習[後]では、これまで意図を考えずに実施していたことに対して検討し始めたり、導入部分の重要性に気づいて工夫を施したりしていた。また、予行練習においてグループのメンバーが生徒役を体験したことにより、生徒の立場での意見も収集することができ、わかりにくい指示や、長すぎる説明、やるべきことの多さに対して工夫を検討することができていた。そうした点においては、予行練習[後]は何かを「加える」のではなく「減らす」「整理する」という傾向が見られた。

4. グループでの模擬授業づくり

「音楽科実践論」では授業後に全員に感想を記述してもらった。その中で、グループでの模擬授業づくりに関連した記述について、KJ法を用いてグルーピングし、見出しをつけた。グループでの模擬授業については肯定的意見と否定的意見に分けられた。見出しと、それぞれの関係については図1のとおりである。

4-1. 肯定的意見

肯定的意見の多くは【授業内容の充実】に関するものであった。具体的には「自分なら取り入れられないような活動が提案され、その意図を聞くことで視野が広がり、色々なアイデアを知れたことが勉強になった」などという〈多様なアイデア〉に関すること、「複数の人の意見を聞きながら授業を練ることで、最初に考えていたものよりも 1 つの授業の意図や目的が一貫してわかりやすいものにまとめることができた」という〈目的や意図の一貫性〉、「さまざまな意見を聞いた上で作った授業の方が、さまざまな生徒がいるクラスで行うには適していると感じた」という〈多様な生徒への意識〉、「自分では考えつけないようなアプローチ方法を知ることができた」という〈目標への多様なアプローチ方法〉があった。

そのほかに【タスクの少なさ】として「自分 1 人で作るよりもタスクの量では楽だった」というような肯定的意見を述べているものもいた。

また【指導案の書き方への意識】について書いている学生もいた。今回は指導案を書く人、予行練習をす

る人、模擬授業をする人がそれぞれ異なるように役割分担をさせたため、その指導案で誰でも実施可能な書き方をする必要があった。その中で「自分ではない人がこの授業を進めていくという条件のもとに指導案や授業の流れを組み立てていくことによって、より多くの選択肢が見えた」というように、普段とは異なる意識で指導案作成に取り掛かっていたようである。

さらに【教材の作成手順】として「ワークシートやパワーポイントの作り方において友達の方法が参考になった」や「自分にはないワークシートの作成方法を段階的に見ることができた」と記述していた。

そして【自分自身についての認識】として、「授業を作りながら、知らないうちに自分の個性に合わせて手段を選んでいることを実感した」という〈自分の性格・癖・偏り〉に関する記述や、「他の人から指摘を受けた時に、もう少し自分の意見を裏付けるものをしっかり説明できる言語力と自信が必要だと思った」などという〈自分に足りないところ〉に関する記述があった。

4-2. 否定的意見

否定的意見でもっとも多いのは【まとめる難しさ】であった。具体的には「1人1人が得意な分野や能力が全く違うので、なかなか授業が1つの方向にまとまらない」という〈得意分野の違い〉、「それぞれに学習させたいことの方向性が少しずつ違って、その意見をすり合わせる事が想像以上の難しさだった」「それぞれに理想とする授業があって、それを1つにまとめるのが難しかった」という〈授業観の違い〉、「人数分の考え方があり、どれも間違っているということ踏まえた上で、授業の方向性としてどこに落とし込めば良いのかを考えるのは大変だった」という〈正誤のなさ〉、「お互いの考えとやりたい活動の意図を汲み取り合って作っていく難しさという点でかなり苦労した」という〈他者の意図の汲み取り〉、「やってみたくい活動を思いのままに取り入れていったが、逆に活動を減らすことに踏み切れなかったことが課題」というように〈人間関係〉を悪くしたくないという思いから他者の意見を否定できなかったような記述もあった。

ほかには【タスクの量の非均衡】として「途中から何もしない人が出て、最終的には2人で授業づくりを進めてしまった。意見を出すメンバーも固定化された」というように、グループでの話し合いの中での非均衡が生じていたようである。

また【授業での活動意図の共有の難しさ】として「指導案を作成する中で自分の意見が取り入れられた場面について、それを実施する段階で、私の意図していた

ものとは違うように授業者に解釈されるということもあった」というように、活動そのものは共有されていても、その意図までは共有できなかったという記述があった。

4-3. 肯定的意見と否定的意見の関わり

肯定的意見と否定的意見を並べてみると、【授業内容の充実】と【まとめる難しさ】が対照に位置している。複数のメンバーでの授業づくりでは、多様な意見が飛び交うことから、これまで1人では思いつかなかったようなアイデアが出てくることになるが、そうした状況をプラスと捉える学生と、他方、マイナスに捉える学生が存在していた。またこれらのアイデアには正解・不正解がないため、何に価値を置いて選択するかが重要となる。その際に、人間関係を気にして、変に他者を尊重しようとしたり、平等にしようとしたりする動きもあったようである。

タスクに関しては、【タスクの少なさ】を記述しているグループはおそらくタスクを上手に分担して授業づくりができたのだろうが、【タスクの量の非均衡】を記述したグループは、積極的に取り組むメンバーとそうでないメンバーができてしまったようである。

またグループ内での意見の共有に関しては、【指導案の書き方への意識】にあるように、自分以外の他者が授業を実施することを想定して、内容や意図をしっかりと共有できたグループもあれば、【授業での活動意図の共有の難しさ】にあるように、共有したつもりでも、実際の授業をみるとその意図までは伝わっていなかったということもあった。その結果「そういう意味ではなかったのに」というネガティブな感情が出てしまった。

しかしながら、この【授業での活動意図の共有の難しさ】という否定的な意見は、肯定的意見の〈自分に足りないところ〉にもつながっている。活動の意図がうまく共有できなかった理由として、自分自身の説明力のなさを挙げている学生がおり、その学生は自分自身の足りないところを知ることができたというプラスの感情へ昇華できていた。

そのほかの〈自分の性格・癖・偏り〉では、グループで他者と協働して授業づくりをすることにより、自分というものの理解につながっていた。自分自身の偏りは、自分を見ているだけでは気づくことのできないことである。

また、否定的意見とは関連づかない肯定的意見として、【教材の作成手順】があった。他者の模擬授業を見るだけでは、ワークシートやパワーポイント資料の完成版しか見ることができないが、今回はグループで

の授業づくりをしていたからこそ、その段階的な作成過程を目の当たりにすることができた。他者がどのように教材を改善していくのか、どのように試行錯誤していくのかという過程を見ることは、自分が作成する際の指針にもなる。例えばワークシートの完成版を見

るだけでは「すごいな」「上手だな」と感心し、「自分にはできない」と自己否定につながることもあるが、作成過程を見ることで、どんなに良いワークシートも修正箇所が多くある状態を経て完成版に至るのだと知ることができる。

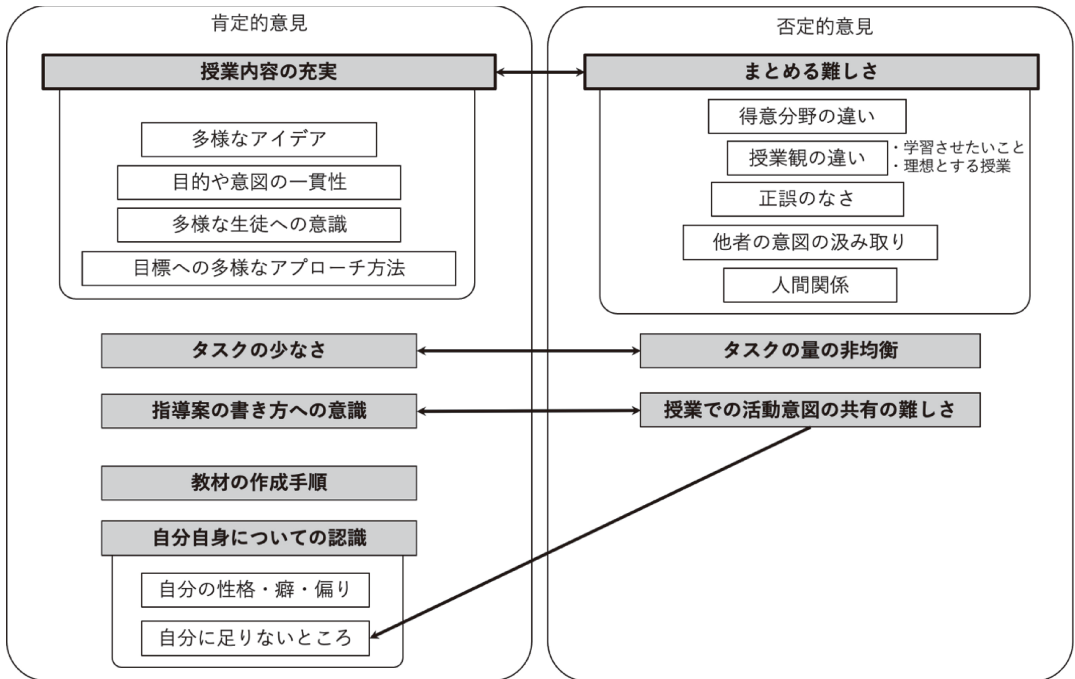


図1 グループでの模擬授業づくりの肯定的意見と否定的意見

5. グループでの模擬授業づくりの成果と課題

予行練習も含めた、グループでの模擬授業づくりの成果と課題についてまとめる。

まず、成果としては、1点目に生徒の実態を意識した授業を検討できたことが挙げられる。模擬授業の予行練習[後]の検討内容では、これまで検討すらもされていなかった導入部分の意図や工夫について考えられていたり、「説明1文に指示は1つ」「視覚的指示を使う」というように、授業のユニバーサルデザインを意識した事項が検討されたりしていた。学生らはこれまで、自分の教えたいこと、伝えたいことを中心に、授業の展開部の流ればかりを工夫していたが、予行練習[後]では、そこに生徒が存在すること、そして生徒の興味関心をこちらに向けなければ伝えたいことも伝わらない、という事実気づいたようである。

成果の2点目は、新たな授業観を形成するきっかけ

となったことである。先行研究にもあるとおり、学生は自分たちが現役の中・高生だった時に経験した音楽科授業のイメージが強く、特に1つ1つの活動の意図を考えることなく、それを「型」として真似る傾向にあった。また、これまで受けてきた専門教育の記憶が強く、どうしても理論的で「難しい」授業になりがちであった。さらに説明力も未熟であり、結果、「難しくてわからない」授業に陥ることも少なくない。音楽科の授業づくりでは、専門教育で培った知識・技能をそのまま生徒に理論的に伝えるのではなく、感覚的に体験させることが重要であろう。こうしたこれまでの自分自身の経験に裏づけられた授業観が、グループでの授業づくりの中で更新されるきっかけとなったのは1つの成果と言える。

他方、課題としては、学生それぞれの個性を活かした授業づくりが困難なことが挙げられる。特に今回は指導案の作成者、予行練習の授業者、模擬授業の授業者をそれぞれ別の学生にするよう指示したことによ

り、誰でも実施可能な授業づくりになり、学生それぞれの強みを活かした授業づくりには繋がらなかった。

6. 今後の課題

グループでの模擬授業づくりでは、当初の想定どおり、多様な意見により議論が広がりを見せる反面、学生にはそれをまとめる難しさや負担感があった。しかしその負担感さえも、将来「チーム学校」として協働的に活動していくという意味においては、必要なものであったとも言える。またタスクを上手に分担できなかったこと、活動の意図を共有できなかったことも、将来教職を志す学生にとっては、克服すべき課題となる。

ただし、本当に課題なのは、その負担感をネガティブに捉えたままで、グループでの授業づくりの経験を終えることである。授業の担当者としては、こうした負担感をいかに、教職を志すものとして価値づけていくのが重要であろう。

また、グループでの模擬授業づくりは、個性の発揮には不向きであることから、これをどのようなタイミングで仕組んでいくべきか、指導の順序についても考えていかなければならない。

【註】

1) 広島大学は、県内に4校の附属学校があり、学生たちはその中の1校で3週間教育実習を行うことになっている。

【参考・引用文献】

- 安藤江里 (2015) 「初等教員養成に必要とされる音楽経験に関する一考察－模擬授業の有効性－」『川口短大紀要』29号, pp.189-203
- 飯田洋介・早川倫子・原祐一・高岡敦史・酒向治子・笠井俊信・桑原敏典 (2018) 「教科内容構成による小学校の授業づくりと教員養成プログラムの改善(2)－社会科, 音楽科, 体育科, 情報モラル教育を事例として－」『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』第167号, pp.101-109
- 大野内 愛 (2022) 「音楽科教員養成における模擬授業の課題に関する一考察－準備のプロセスに着目して－」『広島大学大学院人間社会科学研究科紀要 教育学研究』3巻, pp.155-162
- 小川容子・原祐一・高岡敦史・酒向治子・山本和史・入江隆・桑原敏典 (2018) 「教科内容構成による中学校の授業づくりと教員養成プログラムの改善(2)－音楽科, 保健体育科, 美術科, 技術・家庭科(技術分野)を事例として－」『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』第167号, pp.121-129
- 菅道子・山崎由可里・山名敏之 (2009) 「小学校との連携による創作をテーマとした音楽科の授業づくり－公立学校を拠点にした理論と実践の統合を図る教員養成プログラム開発の一例－」『和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要』19号, pp.111-119
- 小林田鶴子 (2021) 「オンラインを活用した音楽の授業－音楽科教育法を中心として－」『神戸女子大学教職課程研究』4号, pp.1-9
- 日高まり子 (2018) 「音楽科教育法における模擬授業の在り方－協働的授業づくりを通して－」『宮崎国際大学教育学部紀要 教育科学論集』5号, pp.13-27
- 藤田光子 (2019) 「音楽科授業における記録と観点について－指導法の学習の質を考える－」『別府大学短期大学部紀要』38号, pp.35-42
- 松浦修 (2017) 「実践的指導力育成に向けた「音楽科教育法」の授業実践と考察」『神戸女学院大学論集』64巻(1), pp.35-50
- 宮下俊也・森長はるみ (2001) 「音楽教育専攻学部生の音楽授業観－「中等教科教育法(音楽)」における模擬授業の分析・評価を通して－」『教育実践総合センター研究紀要』10巻, pp.51-58
- 山口亮介 (2021) 「音楽実践演習におけるeポートフォリオの活用についての考察－教員養成段階での模擬授業の省察による授業の有効性と課題－」『盛岡大学紀要』38号, pp.81-19
- 渡会純一 (2018) 「教員養成課程における模擬授業の評価の観点に関する一考察－小学校音楽科模擬授業における観点別ルーブリックの作成および実践を通して－」『東北福祉大学研究紀要』42号, pp.47-67